住井すゑとその文学の里（五十八）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

住井すゑの広報うしくへの特別寄稿

今回は住井の創刊間もない『広報うしく第8号』（昭和33年11月15日発行）への寄稿全文を掲載する。

～農村（むら）もだんだん変つて行く～

昭和十年、今から二十三年前、私はこの地に移つてきました。

その頃、まち（祭）といえば子供はもちろん、大人まで、とてもうれしそうに待ちかまえていたものです。それが現在ではどうでしようか。誰もそれほどたのしみに待ちかまえている様子もなく、またまちの当日になつても、あんまりうれしそうな表情など見られなくなりました。

つまり、農村もだんだん変つてきているのです。ということは、農村に住む人たちのこのみが変つた、ということではないでしょうか

そして、これは別に驚くことでもなければ、不思議がることでもありません。ラジオやテレビが普及し、映画もかんたんに見られる今の世の中で、もし昔のように村々を流してあるく三味線ひきのしわがれた唄に魅力を感じる人があつたら、それこそ不思議といわねばならないでしよう。

けれども、ここで私が妙だと思うのは、人々のこのみが時代の線に沿つてこんなにも変つてきているのに、一方にはさつぱり変らない一面があることです。

それは、昔も、今も〝あきらめ〟がいいことです「米が安くても仕方がない。どうせ、政府のえらい人がねだんをきめるんだから。」

「安保条約というのを変えるそうだが、どうせ、よくは変るはずがない。でも仕方がない。政府もアメリカには、タテがつけまいから。結局、貧乏百姓にうまれたのが運が悪いんだから、あきらめるにかぎるのさ！」

いつてみれば、ざつとこんな調子です。しかし、これではさつぱり生きているかいがないのではないでしょうか。人間、あきらめてしまえば、すべて物事は、それでもうおしまいです。そこには、何の進歩も発展もありません。進歩や発展のないところに、人間のよろこび、人間の幸福がないのはあまりに当然です。

私たちが生きているのは（或いは生きていられるのは）それぞれに生きていることがたのしいからだと私は思います

そして、たのしいというのはつまり幸福であるか、或いは幸福がやがて訪れるだろうという希望があるので、これは〝あきらめ〟とは正反対です

実際人は生きているかぎり、物事の一さいをあきらめるものではありません。あきらめずに希望をかけているからこそ、お互いに、暑さ、寒さにたえて働いているものです。にもかかわらず、少し自分の仕事と縁が遠いように思う物事に対しては、さつさとあきらめてしまいます。

これが、結局、日本の国を、進歩も発展もないものにしてしまうのだと、私は思うのですが、どうでしようか。

「政治向のことは、えらい人にまかせておけばいいんだ。百姓風情が、逆立ちしてもどうなるものでもない。」

昔、みんな、こうあきらめていました。その結果はどうだつたか…それは、今更ここにいうまでもありません。百姓風情、いやとんでもない働く百姓こそ、一ばん国のことについて、物を言うべきだし、言う実力を持つているはずです。それが言わないのはあきらめぐせがついているからなのです。もつとよくばつて、それこそうんとよくばつて、言つたり、行つたりしてはどうでしようか。そうすれば、農村は、まだまだ変ることでしよう。

中共の農村が変つたはなしを聞いて、ただ感心しているだけでは無意味です。

私たちもそのつもりになれば、もつと住みよい村を、国を築き上げることが出来るのです。私は死ぬまで、物事を中途であきらめることはしたくないと思つています。

そこに希望があり、幸福があり、前進があるのですから―。

（原文のまま）